

# 公的討議における間主観性の 形成過程に関わる実験検討

青山 恒佳<sup>1</sup>・岡本 敦也<sup>2</sup>・羽鳥 剛史<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 学生会員 愛媛大学大学院 生産環境工学専攻 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3)

E-mail: aoyama.tsuneyoshi.08@cee.ehime-u.ac.jp

<sup>2</sup> 非会員 三九株式会社 機工部門 (〒712-8051 岡山県倉敷市中畝 1-7-23)

<sup>3</sup> 正会員 愛媛大学大学院准教授 生産環境工学専攻 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3)

E-mail: hatori@cee.ehime-u.ac.jp

社会基盤整備に関わる公的討議において、討議参加者の間でいかにして互いの見解や関心について間主観的な了解を形成することが出来るかが重要な課題となる。本研究では、公的討議における間主観性の形成過程を明らかにすることを目的として、社会基盤整備に関わる対面形式の討議実験を行った。具体的には、大学生 46 名を対象にして、原子力発電所の再稼働を議題として 2 人 1 組 (合計 23 組) で議論を行ってもらった。そして、実験前後の参加者の賛否意識や相手の意見に対する見解を比較することにより、間主観性の形成の程度を測定した。実験で得られたデータより、討議における発話の内容や視線・相槌等と間主観性の形成との関連性を調べ、間主観性の形成に影響を及ぼす要因について検討した。

**Key Words:** *public debate, intersubjectivity, meta consensus, discourse analysis, interpersonal perspective*

## 1. はじめに

社会基盤整備は、地域住民をはじめとした多様な主体に直接的・間接的に影響を及ぼす。そのため、住民代表や有識者、企業・団体の代表等との間で公的討議を行い、合意形成を図ることが求められている。パブリック・インボルブメント (Public Involvement ; PI) 等の公的討議は、多くの社会資本整備の過程で実施されており、利害関係者の多様な価値観や利害関心の把握や公共事業に関する判断の社会的妥当性の検証等において重要な役割を担っている。しかし、利害関係者の価値観や利害関心が多様化する中で、全ての利害関係者を満足させるような合意形成を行うことは実質的に不可能である。多様な関係主体の利害の調整は容易ではなく、円滑な意思決定が成されないことが少なくない。現実問題として、公的討議の場において協調的な討議が行われない場合や、一部の討論参加者が議論を自らが望む結論へと恣意的に誘導する場合もある。さらに、価値観や利害関心が互いに異なる討議参加者の間において、合意が得られず議論が行き詰る場合もある。公共事業の実施過程においては、多様な利害関係者とともに合意を図るといった合意と多様性のジ

レンマ問題といかにして向き合っていくかが大きな課題となっている。

合意と多様性のジレンマについて、羽鳥ら<sup>1)</sup>は公的討論における合意の契機と対立の契機を統合させることの重要性を指摘している。合意とはそもそも、社会的判断の正統性を担保する上での重要な役割を担っている一方で、いかなる合意も必然的に排除という行為に基づいている<sup>2)</sup>。そのため、多様性を維持したまま直接的に合意を形成することは不可能であり、また、短絡的な合意や無制限な多様性を追求することも、公的討論の基本的な性質に反している。そこで、合意と多様性の対立理念を調和させる原理として、Dryzek<sup>3)</sup>の提唱するメタ合意 (meta-consensus) の概念に着目する。

メタ合意は、合意や不合意の存在に対する高次の認識的な合意を表しており、合意の契機を内包しているものと考えられる。メタ合意は、利害関係者の関心が社会の中で配慮されていることに対する内省的な合意を表している。討議の場においては、討議参加者が互いの見解や論点について共通の理解に達し、議論が一定程度成熟した状況を指す。討議参加者は、たとえ自分の意見に対する合意が得られていなくても、他の参加者が自分の関心

表-1 Laing による間主観性の定義<sup>7)</sup>

	自己 S	他者 O
直接的 パースペクティブ	自己 S の事象 X に対するパースペクティブ (S→X)	他者 O の事象 X に対するパースペクティブ (O→X)
メタ パースペクティブ	自己 S の他者 O の直接パースペクティブに 対するパースペクティブ (S→O→X)	他者 O の自己 S の直接パースペクティブに 対するパースペクティブ (O→S→X)
メタメタ パースペクティブ	自己 S の他者 O のメタパースペクティブに 対するパースペクティブ (S→O→S→X)	他者 O の自己 S のメタパースペクティブに 対するパースペクティブ (O→S→O→X)

や信念に配慮していることを認識することが可能である。また、討論に関する単純な合意の場合は、討論を過度に単純化させる問題を孕んでいるのに対して、メタ合意においては、各討論間で必ずしもその価値や信念、選好は共有化されていないものの、各討論のアイデンティティが認められており、相対立する討論間の協力関係を促進し、社会の統合化に貢献する。公共事業の意思決定問題が、特定の討論のみによって理解される場合、恣意的な問題設定や事業評価が適正に行われぬ恐れがある。そうした問題を回避し、社会的意思決定の正統性を担保するためには、多様な討論を一元的に捉えるのではなく、メタ合意の形成を促すことが重要になる。

公的討議を通じてメタ合意が形成された場合、間主観的合理性が担保されたかどうかが重要となる<sup>4)</sup>。間主観的合理性は、価値、信念、選好に関するメタ合意の間で整合関係が保たれ、それが意思決定に適切に反映されるかどうかに関わる評価基準である。すなわち、メタ合意と言う主観的領域と意思決定と言う客観的領域との整合的な関連を要求している。このうち、客観的領域は、異なる利害関係者が互いの意見や関心をどのように理解しているかという、間主観性 (intersubjectivity) が形成されることで認識される。そのため、社会基盤整備に関わるメタ合意や間主観的合理性の形成には、間主観性の形成を促すことが重要となる。

間主観性は哲学、社会学、心理学をはじめ、社会科学の分野において議論が展開されてきており、様々な定義が為されている。廣松<sup>5)</sup>は「自分と他者達とが、相互に主体として承認し合いつつ単一の世界を共有すること」と定義しており、Mori and Hayashi<sup>6)</sup>は「ある対象に対して共通の定義を与えているとの感覚上の合意」と定義している。また、Laing<sup>7)</sup>は「合意や不合意に対する相互の認識」と定義しており、Laing の定義した各レベルでのパースペクティブは表-1 に示す通りである。このように間主観性の定義は多義的であるが、「自己と他者との間でそれぞれ対象を主体的に認識していることを了承しながら、そうした認識を共有化する関係性」と言い換えることができる<sup>8)</sup>。より日常的な表現を用いれば、「自身と相手が、お互いが考えていることを正しく理解している状態」と述べる事が出来る。我々は日常生活

を送る上で無意識のうちに、この間主観性を考えている。例えば、二人で今日のお昼ご飯に何を食べるか話しているという状況を想定すると、お互いに“相手が何を食いたいと考えながら会話をしているのか”について無意識のうちに考えているため、相手が何を食いたいのかについて会話から想定することが出来る。この様に間主観性は、関係者が相互の主観的な意見や関心をどのように理解しているかを評価する基準になるため、公共事業に関わる公的討議の場においても、間主観性に考慮した意見交換を行うことが望まれる。

間主観性を、Laing の定義に基づいて各パースペクティブレベルから考えると、合意・不合意は直接的パースペクティブと直接的パースペクティブを比較することで確認でき、メタパースペクティブと直接的パースペクティブを比較することで理解・誤解が、更にメタメタパースペクティブとメタパースペクティブを比較することで理解誤解の認識の有無を確認することができる。

本稿では、このような間主観の関係性に着目し、公共事業に関わる公的討議において、討議参加者間の間主観性の形成に係る条件や要因について、実験的に検討することで間主観性の形成に関する基礎的な知見を得ることを目的とした。

## 2. 方法

### (1) 実験手続き

本研究では、大学生・大学院生を対象に、2人1組で対面形式での討議実験を行った。実験協力者は46名(23組)で、男性26人、女性20人、平均年齢は21.19歳(標準偏差1.58歳、最小19歳、最大26歳)であった。討議のテーマは「原子力発電所の再稼働問題」を設定し、議論の目的は「オブザーバー制」を仮想シナリオとして用いた(教示したのみで実際には行っていない)。実験協力者には、討議の内容を第三者の意思決定の参考材料として用いる旨を伝え、討議内容を録音し、20分程度自由に議論を行ってもらった。討議実験の前後において、アンケートの協力を依頼し、賛否意識や議論相手の賛否、議論相手の考える自身の賛否を尋ねることで間主観性を測定した。

表-2 実験に用いた間主観性尺度の質問項目

	質問文
賛否意識 (直接レベル)	あなたは、原子力発電に賛成ですか？
間主観性 _メタレベル	相手は、原子力発電に対してどのような意見を持っていると思いますか？
間主観性 _メタメタレベル	相手は、あなたが原子力発電に対してどのような意見を持っていると考えていると思いますか？

表-3 発話機能コーディング・スキーマのカテゴリ

カテゴリ	説明
葛藤的 発話	反論 相手の考えと異なる立場や考えを表明する。
	疑問 相手の考えや知識の確かさを疑う。
	問題 相手の考えや知識についてその問題点を分析して指摘する。
協調的 発話	換言 相手の発言を、より適切な表現や具体例に言い換える。
	解釈 相手の発言に、その詳細を付け加えたり、言おうとすることを先取りして言う。
	確認 相手の考えや相手との合意内容について自分の理解が適切かどうか確認する。
	質問 相手に自分の分からないことや知らないことについて尋ねる。
	同意 相手の発言に対して、自分が賛成していることを示す。相づちは含まれない。
	説明 先に述べた自分の考えについて、さらに詳細を述べたり、根拠や理由を加えたりする。
	意見 自分の意見や考えを述べる。今話し合われている内容に関連する情報を提示する。
	議論 議論の進行・テーマに対する発言
	反復 相手の発言の一部、もしくは全部を繰り返す
	応答 直前の質問や要求に答える
	逸脱 議論の本筋から外れた発話
	独白 独り言。相手に応答を求めない発話
	相槌 「うん」、「はい」など
	その他 笑い声等

(富田ら<sup>10)</sup>より一部改変)

## (2) 間主観性の検討に用いる変数

本研究では、間主観性の形成に影響を与える要因を探るため、討議実験前後のアンケートと討議データを説明変数として用いた。事前アンケートにおいては、原子力発電に対する賛否や、実験協力者個人の議論やコミュニケーションに関する能力・認識等を測定する項目を尋ねた。事後アンケートにおいては、各レベルでの間主観性を測定するため、議論終了時点での原発再稼働に対する実験協力者の賛否意識、実験協力者の考える議論相手の賛否意識、実験協力者が考える議論相手が考えているであろう実験協力者の賛否意識について尋ねた。実際に尋ねた質問内容を表-2 に示す。回答は、メタレベルでの間主観性尺度においては「相手は強く反対している」から「相手は強く賛成している」まで、また、メタメタレベルでの間主観性尺度においては「相手は、『あなたは強く反対している』と思っている」から「相手は、『あなたは強く賛成している』と思っている」まで、それぞれ5件法で求めている。本研究においては、議論を行った実験協力者間の直接的な賛否意識の接近度を「合意傾向」として扱うこととし、間主観性を示す尺度としては、

実験協力者のメタレベルでの認識と議論相手の直接的な賛否意識の一致度を「理解度\_メタレベル」、実験協力者のメタメタレベルでの認識と議論相手のメタレベルでの認識の一致度を「理解度\_メタメタレベル」とした。いずれの理解度においても、理解している場合を0とし、誤解が大きくなるにつれて負に大きくなる変数としている。事後アンケートではこれらの各間主観性尺度に加えて、小松ら<sup>9)</sup>の質問項目を用いて議論や議論相手に対する印象を測定した。

## (3) 議論内容のプロトコル分析

全 23 回の議論の録音データをすべて逐語記録し、実験参加者の発言をその発話機能に基づいてコード化した。その際、富田ら<sup>10)</sup>の発話機能コーディングスキーマを一部改変し、表-3 に示す「反論」「疑問」「問題」「換言」「解釈」「確認」「質問」「同意」「説明」「意見」「議論」「反復」「応答」「逸脱」「独白」「相づち」「その他」の 17 カテゴリに分類した。分類は、発話者が交代するか、もしくは二人とも沈黙するまでの発言を一回の発話とカウントした。ここ富田ら<sup>12)</sup>の分類に

表-4 合意傾向とメタ・メタメタレベルの認識のずれの分布

単位:人	認識のずれ_メタレベル					認識のずれ_メタメタレベル					計	賛否変容 (対議論相手)
	2	1	0	-1	-2	2	1	0	-1	-2		
合意傾向	2		1		1			1	1		2 (4.3%)	↑ 接近 ↓ 離反
	1		2	10		1	1	4	4	2	12 (26.1%)	
	0		5	16	4			20	5		25 (54.3%)	
	-1		1	2	1			2		2	4 (8.7%)	
	-2		1					1			1 (2.2%)	
欠損値			2					2			2 (4.3%)	
計		9 (19.6%)	31 (67.4%)	5 (10.9%)	1 (2.2%)	1 (2.2%)	1 (2.2%)	30 (65.2%)	10 (21.7%)	4 (8.7%)	46 (100%)	

認識 (対議論相手) ← 賛成寄り に誤解      理解      反対寄り に誤解      賛成寄り に誤解 ← 理解      反対寄り に誤解

従い、「反論」「疑問」「問題」の3コードに分類された発話を「葛藤的発話」, 「換言」「解釈」「確認」の3コードに分類された発話を「協調的発話」と呼称する。葛藤的発話と協調的発話はいずれも、個人の対立・支持の認知を支援するとともに、説明行動を誘発する傾向にあることが既往の研究で示されている<sup>13)</sup>。議論において、自身の立場を表明することや、詳細な説明を述べていくことは、間主観性を形成する上で必要な行動であるため、葛藤的発話、協調的発話に着目した分析を行う。

### 3. 結果

#### (1) 各間主観性の相違の検証

討議実験後に測定した各レベルでの間主観性尺度を用いて、合意傾向、メタレベルの理解度、およびメタメタレベルでの理解度を算出した。合意傾向とメタレベルでの認識、およびメタメタレベルでの認識の分布を表-4に示す。メタレベル、メタメタレベルのいずれにおいても同程度の割合の人が理解しているものの、誤解の程度や誤解している賛否の方向が異なっていることが確認できる。本研究では、理解あるいは誤解の要因に主眼を置くため、以降では賛否の方向を含めない絶対値を用いて各レベルでの理解度と扱うものとする。

次に、合意傾向、メタレベル、メタメタメタレベルの理解度の関連性を検討するため、各レベルの理解度の相関分析を行った。また、議論相手との賛否差(例えば賛成同士の議論と賛否が対立している者など)の相違による間主観性の傾向の有無を確認するため、討議実験を行う前の時点での賛否意識の差とメタ・メタメタレベルの理解度の相関分析を行った。これらの結果を、併せて表-5に示す。相関分析結果から、議論相手との賛否意識の相違や、賛否意識の変容、メタ、メタメタレベルの間主観性の間に有意な相関関係は確認されず、賛否意識や賛否意識の変容、各レベルの間主観性は、それぞれ異なった要因によって形成されている可能性が考えられる。

表-5 各間主観性尺度間の相関分析結果

	理解度_メタレベル		理解度_メタメタレベル	
	相関係数	p-値	相関係数	p-値
事前賛否差	-.151	.329	-.081	.601
合意傾向	.092	.551	-.182	.237
理解度_メタレベル			.165	.273

表-6 議論内での全体の発話に関する結果

	総発話数 (回数)	総発話量 (文字数)	発話一回当たりの 発話量
平均値	170.87	5622.48	35.84
標準偏差	57.67	1029.78	10.88

表-7 発話データと各間主観性尺度の相関分析結果

		合意傾向	理解度_メタレベル	理解度_メタメタレベル
		議論全体	総発話数(回数)	.049
議論全体	総発話量(文字数)	-.005	.059	.079
	発話一回当たりの発話量	-.077	-.030	-.110
個人	総発話数(回数)	.088	.091	.170
	総発話量(文字数)	.064	.066	.029
	発話一回当たりの発話量	-.087	-.003	-.122

#### (2) 議論内容と間主観性の関連性の検討

討議実験より得られた議論について、表-3に示した発話機能に基づいてコード化した発話全体に関する結果の概要を表-6に示す。また、発話全体での各データと各間主観性尺度の相関分析結果を表-7に示す。結果からはいずれのレベルにおいても有意な相関関係が確認できず、発話全体での発話の回数や量が合意や各レベルでの認識に影響を及ぼすとは限らないことが確認された。この結果は、間主観性の形成には、議論における発話の回数や量以外の影響が大きい可能性を示している。

表-8 機能別発話回数と各間主観性尺度の相関分析

		合意傾向	理解度_ メタレベル	理解度_ メタメタレベル
葛藤的 発話	反論	.031	-.312 *	.099
	疑問	-.050	-.271 +	.145
	問題	.279 +	.192	.277 +
協調的 発話	換言	-.266 +	-.085	-.083
	解釈	-.004	.263 +	.231
	確認	.368 *	-.285 +	-.249 +
	質問	.010	-.047	.118
	同意	-.154	-.064	.011
	説明	.053	-.221	.020
	意見	.009	.184	.409 **
	議論	.099	-.089	-.149
	反復	-.137	.137	.098
	応答	.038	.201	.214
逸脱	.150	.113	.119	
独白	.067	-.039	-.041	
相槌	.031	.121	-.003	
その他	-.169	-.136	-.005	

+: p<.10, \*: p<.05, \*\*: p<.01

次に、機能別の発話回数と各間主観性尺度の相関分析結果を表-8 に示す。ここで、議論は双方向のやり取りであるため、個人の発話ではなく、二者の議論内における各機能の発話を変数として設定している。まず、メタレベルにおいては、「解釈」が理解に対して正の、「反論」、「疑問」、「確認」が理解に対して負の有意な相関関係にある傾向が確認された。また、メタメタレベルにおいては、「問題」、「意見」が理解に対して正の、「確認」が理解に対して負の有意な相関関係にある傾向が確認された。メタレベルの理解に正の相関関係を示した機能について、「解釈」は、議論相手から受け取った主張内容の関連事項や自身の認識等を交えて発話されるため、自身の認識の誤りがあれば直ちに正すことのできる性質があるものと考えられる。また、メタメタレベルの理解に正の相関関係を示した機能について、「問題」は議論相手の主張や認識に対する誤りを指摘する機能であるため、自身の発話が相手の認識に与える影響の理解が容易なのではないかと考えられる。これらの結果は、葛藤的発話および協調的発話が議論相手に対して自身の立場の認識を促すとともに、説明行動を引き出す性質を持つとする富田ら<sup>10)</sup>の示唆を踏襲する結果となった。しかし、「疑問」および「確認」においては、誤解が促進される傾向を示す結果となった。これらの要因として、「疑問」に関しては、議論相手の主張の論理的な誤りや、主張に対する率直な問いなど、自身の立場表明を発話意図に含まない「疑問」に対して、議論相手が自身と異なる立場の認識を受け取り、誤解を促した可能性が考えられる。また、「確認」に関しても「疑問」と同様に、立

表-9 議論の展開パターン

パターン1：同一の論点について、両者から「意見」が述べられた場合  
 パターン2：「反論」の前後に「意見」が述べられている場合  
 パターン3：「疑問」の前後に「意見」が述べられている場合  
 パターン4：「問題」の前後に「意見」が述べられている場合  
 パターン5：「換言」の前後に「意見」が述べられている場合  
 パターン6：「解釈」の前後に「意見」が述べられている場合  
 パターン7：「確認」の前後に「意見」が述べられている場合

表-10 理解有無による各パターン出現回数の比較  
 (上：メタレベル, 下：メタメタレベル)

メタレベル	理解群(N=31)		誤解群(N=15)		t 値
	M	SD	M	SD	
パターン1	6.61	2.552	4.20	3.385	2.698 **
パターン2	.54	.519	1.00	.707	-1.770 +
パターン3	1.12	1.107	.50	.855	1.806 +
パターン4	.89	.506	.57	.535	1.463
パターン5	2.33	2.257	1.67	1.581	.776
パターン6	.39	.761	.40	.828	-.052
パターン7	2.87	1.842	.89	1.364	2.917 **

メタメタレベル	理解群(N=30)		誤解群(N=16)		t 値
	M	SD	M	SD	
パターン1	6.93	2.741	3.75	2.463	3.881 **
パターン2	.93	.616	.38	.518	2.141 *
パターン3	1.20	1.155	.40	.632	2.462 *
パターン4	.88	.526	.67	.500	1.056
パターン5	2.73	2.219	1.00	1.000	2.615 *
パターン6	.40	.770	.38	.806	.103
パターン7	2.74	1.968	1.69	1.750	1.541

+:p<.10, \*:p<.05, \*\*:p<.01

場の表明を含まない確認が、議論相手に誤解を与える可能性が考えられる。また、「確認」の発話者の意図しない立場表明を議論相手が認識するために、メタメタレベルにおいても誤解が生じるものと考えられる。

そもそもメタレベル、メタメタレベルにおける理解には、両者の主張や立場の表明が必要となることから、各発話の前後において当該論点に対する発話者の「意見」の言及が前述した誤解の可能性を回避することが可能であると考えられる。そのため、各葛藤的発話や各協調的発話の前後に同一論点について「意見」を言及している場合を発話パターンとしてカウントし、検討することとした。また、「意見」に関して、特定の論定に対する両者からの発話の有無をパターンに加え、表-9 に示す7パターンの出現をカウントした。カウントされた各議論パターンの出現回数について、表-10 に各レベルでの理解/誤解(表-4における認識のずれが0か否か)による平均値の差のt検定の結果を示す。この結果から、同一論点

表-11 機能別発話回数を用いた各間主観性尺度の回帰分析結果

合意傾向		理解度_メタレベル		理解度_メタメタレベル				
	$\beta$	t 値		t 値		t 値		
(定数)		-0.117	(定数)	-4.108 **	(定数)	-4.849 **		
確認	.368	2.566 *	応答	1.542	5.101 **	意見	.668	3.973 **
	$R^2$	.136	質問	-1.461	-4.834 **	同意	-.411	-2.441 *
	p	.014		$R^2$	.378		$R^2$	.269
	*:p<.05, **:p<.01			p	.000		p	.001
				*:p<.05, **:p<.01			*:p<.05, **:p<.01	

の「意見」を含む「疑問」, 「確認」がメタレベルの, 「反論」, 「疑問」, 「換言」がメタメタレベルの理解を促進する有意な傾向が示された。そのため, 「疑問」および「確認」は, 自身の立場や主張を明確にしないまま発話することで, 議論相手の誤解を招く可能性が示唆される。

間主観性尺度と各発話機能との関連性の有無の確認に加えて, 各間主観性尺度に対してより直接的に影響を及ぼす発話機能について検討するため, ステップワイズ法により回帰分析を行った。表-11 に示す回帰分析結果において, まず, 合意傾向に直接的に最も影響を及ぼす発話機能として「確認」が正の影響を及ぼすというが得られた。これは, 「確認」の発話が, 賛否意識の規定要因となっている各論点に対する内省を促すとともに, 相互の賛否意識や各論点に対する主張が明確に認識され, 理解されることで合意に向うものと考えられる。次に, メタレベルの理解度においては, 「応答」が正の影響, 「質問」が負の影響を及ぼすという結果が得られた。これらが得られた要因としては, まず「応答」は, 質問等に対して応答の回数が増えるにつれて尋ねた内容だけでなく, 「応答」の発話者の質問内容に関する認識や主張が述べられるため, メタレベルでの理解が促進されるものと考えられる。また, 「質問」においては, 質問の回数を重ねたとしても, 得られる情報は不明な事柄が何かということであり, 賛否に関する認識が述べられる内容が限られているため, 両者の意志疎通が円滑に図られず, メタレベルでの理解に正の影響を及ぼさないものと考えられる。最後に, メタメタレベルでの理解度においては, 「意見」が正の影響, 「同意」が負の影響を及ぼすという結果が得られた。「意見」に関しては, 意見が述べられることで受け手のメタレベルでの理解が促進され, 相手の反応等の情報も相まって理解/誤解の理解が促進されるものと考えられる。「同意」は, 議論の中で聞く立場にいる場合の発話であり, 同意の頻度が高くなるにつれて議論相手に伝達される情報が限定され, 理解/誤解の誤解を招く可能性が高まるものと考えられる。

#### 4. 結論

本研究では, 公共事業の合意形成問題における合意と多様性の対立的な理念を調和させる原理として間主観性に焦点を当て, 公的討議における間主観性の基礎的な知見を得ることを目的に実験検討を行った。本実験より, 直接的な合意傾向とメタレベルの間主観性, メタメタレベルの間主観性は, いずれも異なった説明要因を持っている可能性が確認された。また, 間主観的な理解は議論における発話の頻度や量に依存しない傾向が確認され, 議論の内容によって理解あるいは誤解が形成される可能性が示された。本研究では, 議論における発話の機能に着目し, 発話機能の「確認」においては, 直接的な合意に正の影響をもたらす一方で, 自身の立場や主張を明確にする過程を伴わずに発信することで他者の誤解を招く可能性が示されている。

間主観性の形成を目指す上で, メタレベルにおいては如何に議論相手の賛否意識の規定要因となり得る論点を偏重することなく議論の俎上に載せるかが課題となる。また, メタメタレベルにおいては, 自己の発話が相手にどのような印象を与えるかに対する正確な認識が重要である。葛藤の発話と協調的発話は, いずれも新たな説明原因への言及を誘引する一方で, 対立あるいは支持といった立場の表明が付随しやすい機能を持つことから, 無自覚のままに他者のメタレベルでの誤解を招き, それに伴ってメタメタレベルでの更なる誤解に発展する恐れもある。現実の公的討議においてこのような事態が発生した場合, 参加者の理解の程度や主義・主張等に即した発言をすることが困難となり, 非効率的な議論に発展することや, 議論そのものを成立させることが困難となる可能性まで考えられる。このような事態を避けるためには, 間主観性に関する更なる研究の蓄積が必要であり, メタ合意の内容やメタ合意間の整合性を評価する方法論の開発が重要な課題となっている。

本研究では, 間主観性の基礎的な知見として, 議論における発話の機能に着目したが, 議論とは双方向で発展性を持ったコミュニケーションであることから, 議論さ

れる論点の種類や特定の論点に対する深化の程度、論点の転換方法、根拠の提示など、あらゆる角度からより一層の検討を行うことが求められる。議論の質について様々な角度から評価を行い、間主観性の形成に寄与する事象について更なる実証研究の蓄積が重要である。

#### 参考文献

- 1) 羽鳥剛史, 小林潔司, 鄭蝦榮: 討議理論と公的討論の規範的評価, 土木学会論文集 D3, Vol.69, No.2, pp.101-120, 2013
- 2) Mouffe, C.: Democracy, power and “the political”, In: Benhabib, S. (ed): *Democracy and Difference: Contesting the Boundaries of the Political*, pp.245-256, Princeton University Press, 1996.
- 3) Dryzek, J.: *Foundations and Frontiers of Deliberative Governance*, Oxford University Press, 2010.
- 4) Niemeyer, S. and Dryzek, J.: The ends of deliberation: meta-cousensus and inter-subjective rationality as ideal outcomes, *Swiss Political Science Review*, Vol.13, pp.497-526, 2007.
- 5) 廣松渉, 廣松渉コレクション第一巻 共同主観性と構造変動, 情況出版, 1995
- 6) Mori, J. and Hayashi, M. The achievement of intersubjectivity through embodied completions: A study of interactions between first and second language speakers. *Applied Linguistics* 27 (2): 195-219. 2006.
- 7) Laing, R.D., Phillipson, H. & Lee, A.R. *Interpersonal Perception*. Tavistock Publications. 1966
- 8) 羽鳥剛史, 小松佳弘, 藤井聡: 個人の大衆性が弁証法的議論に及ぼす影響に関する実験検討, *Contemporary and Applied Philosophy*, No.5, 1052-1073, 2014.
- 9) 小松佳弘, 羽鳥剛史, 藤井聡: 個人の大衆性と弁証法的議論の失敗に関する実証的研究, 土木計画学研究・講演集, CD-ROM, Vol.39, 2009
- 10) 富田英司, 丸野俊一: 曖昧な構造の協同問題解決における思考進展過程の探索的研究, *認知科学*, 12(2), 89-105, 2005